

日本における南洋への関心と、その広がり

―博物館資料をめぐる―

福西 大輔

はじめに

熊本博物館収蔵資料の中には海外から集められたものもある。その一部はミクロネシアの島々を中心に、いわゆる「南洋」から集められたものである。表1は、熊本博物館が所有する南洋に関する資料である。これらの多くが、南洋に関心があった一般の日本人によって集められたものであった。

こうした資料をもとに熊本博物館

では、企画展「南洋への憧れ ―熊本博物館収蔵海外資料展―」（平成二六年六月一三日〔金〕～七月一三日〔日〕）を開催した（写真1・2）。それに合わせて、熊本博物館所蔵の南洋資料を調べ、わかったことを本論では紹介し、日本人が近代において、南洋をどのように捉えていったのか探っていききたい。

また、金子淳によれば博物館には「政治性」があり、その成立や展示内容には時代が反映されているとい

表1 熊本博物館所蔵南洋資料一覧

	資料名	個数
1	南洋の写真	26
2	貝製釣り針	1
3	カヌーの模型	1
4	貝製装飾品	2
5	貝斧	1
6	煙草入れ	1
7	貝貨	24
8	石貨	1
9	機織り機	1
10	影絵人形	3
11	カヌー	2



(写真1) 展示会の様子1



(写真2) 展示会の様子2

う（金子 二〇〇二）。もし、その通りならば、博物館が所有する資料にも「政治性」を見出すことが出来ると考え、こうした視点でも南洋の資料を見ていきたい。

(1) 南洋のイメージ

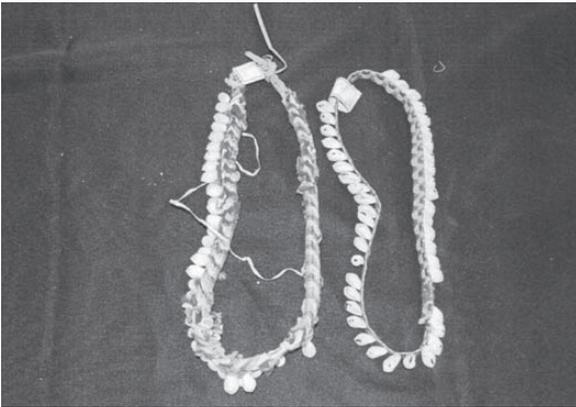
日本は第一次大戦後、国際連盟から委任統治の命を受けて、北マリアナ諸島・パラオ・マーシャル諸島・ミクロネシア連邦を統治することになると、中島敦に代表されるように、日本人の南洋への関心は深まっていった（註1）。落合一秦は、北は文明、南は野生であり、北は見る側で南は見られる側という構図があり、それは植民地主義の考えに基づいているという（落合一九九六 五六～六五）。こうしたこともあり、日本人は南国を代表す

る場所として、南洋に暖かい「未開」のユートピアというイメージを持った。そのため、日本政府はパラオ諸島に置いた南洋庁が中心となって、第一次大戦後は南洋の西洋化・近代化を推し進めていく。日本からも多くの人が南洋に行った。それにともない自然と共存しながら独自の文化を築き上げた先住民の生活も大きく変わっていく中、南洋から多くの民族資料が収集され、日本に送られてきた(川村 一九九六 一五七〜一五九)。

熊本博物館にもこうした時期に、日本に持ち込まれたと思われる南洋の資料がある。多くが貝で作られたものであった。南洋の島々はサンゴ礁で出来ている島が多いため、石が手に入りにくいからである。蝶貝を加工してつくった貨幣で、婚礼などの儀礼で使用した「貝貨」(写真3)、シャコ貝を刃先利用した「貝斧」、蝶貝で作られた釣り針の「貝製釣り針」、イモ貝類と



(写真3) 貝貨



(写真4) 貝製装飾品

植物繊維で編まれた紐を使って作られ、頭飾りに使用された「貝製装飾品」(写真4)などである。こうした貝の文化が、日本に持ち込まれることによって、南洋のイメージを作り上げていった、あるいは南洋のイメージが、こうした貝製品の資料を集めさせる要因になったと考えられる。ちなみに、これらの資料の多くが「カナカ族」のものとして集められている(註2)。

熊本博物館の南洋資料の中には詳しい来歴がわかっているものもある。「石貨」はヤップ島で作られた石の貨幣で、婚礼などの儀礼で使用された(写真5)。熊本出身の衆議院議員が南洋視察団に同行した際、現地で集めたものだと言録が残されている。また、パラオ・マーシャル諸島で使用された「木製カヌー」は、漁業などで使用されたもので、現地から軍艦で日本に運ばれてきたという。こうしたことから熊本が近代以降、軍都として栄えたことも南洋の資料が熊本に持ち込まれたことの背景にはあると考えられる。言い換えれば、軍人たちの関与によって、南洋から持ち込まれたものだといえよう。海軍士官の松岡静雄(一八七八―一九三六)は、カロリン諸島のポナペ島に駐留した(川村 一九九六 一五〇〜一五六)。彼は軍人という立場を利用し、南洋庁などの力を借りて、民族調査を行なったことが知られている(註3)。

また、台湾先住民の武器も熊本博物館は所蔵している(表2参照)。彼ら



(写真5) 石貨

も「南洋」と並んで「南国」の人々として、熊本では認識されていた。それを裏付けるように熊本で行なわれていた博覧会では、南国の一部として台湾が紹介されている。

(2) 博覧会と南洋・南国

戦時色が強くなってきた昭和一〇

(一九三五)年に熊本では「新興熊本博覧会」が開催され、大勢の人々で賑わった。『新興熊本博覧会記念画報』や『新興熊本博覧会誌』によれば、「海外館」「満州館」「台湾館」

「朝鮮館」というパビリオンも造られた。海外館では「南洋之部」が設定され、ゴムやカカオなどの特産物や住民の衣服、そして槍などの武具が展示された。

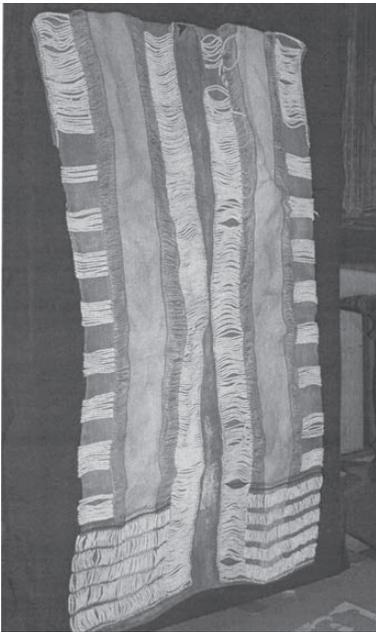
また、『新興熊本博覧会誌』によれば、台湾館では物品紹介の中で「何れも南国気分を横溢せる華麗な装飾法」と記しており、台湾も南国の一部として認識されていたことがわかる。こうしたことを背景に熊本でも身近な南国として台湾への関心が高まり、台湾先住民の資料が集められていった。このように台湾が認識されていた理由は日本との物理的な距離の近さもあるが、明治二七・二八(二八九四・九五)年の日清戦争の処理により下関条約が結ばれ、台湾が日本に割譲されていたこともある。

表2 熊本博物館所蔵台湾先住民資料一覧

	資料名	個数
1	礼装着	1
2	珠裙	3
3	台湾先住民の鉞	1
4	台湾先住民の刀	5
5	台湾先住民の槍	1
6	台湾先住民の弓	2
7	台湾先住民の矢	3
8	玩具の舟	1
9	台湾先住民の矢筒	1

熊本博物館には、タオ族が作ったとされる玩具の舟やパイワン族の刀などが収集されている。台湾資料の中で特に数があるのは、勇猛果敢だとされたタイヤル族のものである。タイヤル族の刀(写真6)や弓、そして「珠裙」(写真7)である。「珠裙」は男性の儀礼服で、宝貝を加工して取り付けられたものである。こうした貝を使用した儀礼服・「珠裙」の存在も台湾を南国の一部として見られことになる要因の一つだと考えられる。

このタイヤル族は日本統治下で昭和五(一九三〇)年に霧社事件という抗日暴動事件を起した(川村 一九九六 一一四〜一一七)。日本軍が鎮圧する程の騒動になり、植民地政策の見直しの切掛になったといわれている。そして、この事件を契機に日本人はタイヤル族が勇猛果敢な存在だと認識するようになった(註4)。こうしたことと、先に触れたように熊本



(写真7) 珠裙

が軍都であり、勇ましいものを好む傾向が強かったことが、熊本博物館にタイヤル族の武器が集まってきた背景にはあると考えられる。

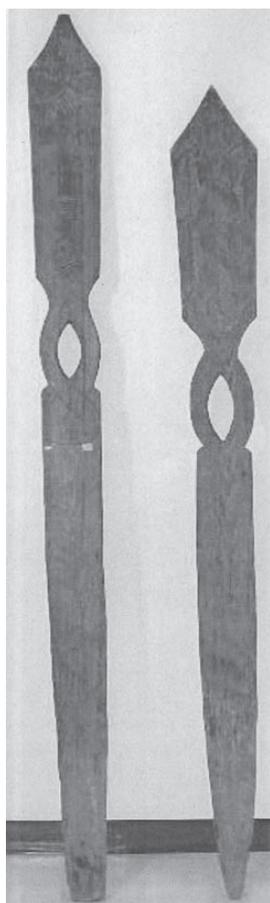


(写真6) 台湾先住民(タイヤル族)の刀

(3) 異文化へのまなざし

南洋をはじめとする南国に向けられていた異文化への視点は、北方に住むアイヌの人々にも向けられた。熊本医科大学長を務めた山崎正董（一八七二—一九五〇年）は国内外の貝類や瓦を集めるコレクターとしても知られ、彼は昭和七・八（一九三二・三三）年に奄美大島や沖縄などに自ら足を運んでいる。そこで、線刻石版のような珍しい考古遺物も集めた。また、台湾の先住民が持っていたと思われる「珠裙」なども収集した。こうしたことから山崎も南国に興味を持った人物の一人であるといえよう。

山崎の関心は南国だけに留まらず、北方にも関心を持つようになる。それを裏付けるように山崎コレクションの中には、樺太アイヌの墓標がある（写真8）。その様式から樺太・東海岸に住んでいたアイヌ人男性の墓標だと考えられるが、どういった経緯でコレクションに入ったのか解っていない。いずれにしても南国への関心が異文化への関心という形で広がっていったと推測される。



(写真8) アイヌの墓標

こうした関心の広がりには山崎に限らない。国際連盟委任統治委員（南洋諸島対応）に就任した民俗学者の柳田國男は大正十一（一九二二）年に『南島談話会』を作り、南洋・南国への関心を示すとともに大正一四

年（一九二五）には『北方文明研究会』も作っている（野村・ほか一九九八 四五二〜四五七）。当時の知識人たちが南洋・南国だけに関心を持っていたのではなく、広い視野で日本の周りを見ていたことがわかる。

結びにかえて

熊本博物館所蔵の南洋資料を来歴などから検討してきた結果、南洋と日本人との関わりが分かった。第一次大戦後、日本は国際連盟からの委任統治の命を受けて、北マリアナ諸島・パラオ・マーシャル諸島・ミクロネシア連邦を統治することになると、人々の南洋への関心はより深まっていった。日本人は貝を使った民族資料を通して南洋に幻想や憧れを抱いた。

南洋への関心の高まりは、東京といった大都市だけでなく、熊本のような地方都市でもあった。熊本が軍都であったことが、南洋への関心をより高めた。こうした中、熊本では博覧会が開かれ、民族資料を通して南洋が紹介され、南洋そして南国のイメージが一般市民にも広がっていった。台湾も身近な南国として捉える動きも生まれ、南国のイメージが拡大していく。

その一方、知識人の中には、南国への関心だけでなく、北方をはじめとする異文化への関心を持つものが現われた。それにより世界の中の日本ということ意識するようになっていく。

こうした最中、第二次世界大戦（太平洋戦争）が起き、南洋の島々の多くが戦場となり、日本とアメリカとの間で熾烈な戦闘となった。この戦いでは先住民を巻き込みながら多くの死者を出し、その中には熊本から出兵した人たちもいた。南洋への憧れが悲劇に変わった時でもあった。これにより日本

が行なっていた南洋の委任統治も終焉を迎え、南洋のイメージが大きく変わるとともに南洋という言葉が使われなくなつた。戦後、新たに南洋から日本に持つてこられる資料は減つていった。

このように熊本博物館という地方博物館資料の来歴を辿るだけでも、近代史や国策の一部を垣間見ることが出来た。こうしたことから博物館資料を研究するには、資料そのものの価値だけでなく、それが収集された経緯などから窺える「政治性」についても着目していく必要があるだろう。

(註1) 中島敦 一九四二「環礁——ミクロネシア巡島記抄——」『南島譚』

※ 昭和一六(一九四二)年 パラオ南洋庁へ教科書編纂係りとして赴任する。

(註2) 第一次大戦から第二次大戦の間に使われたミクロネシア、マーシャル諸島、パラオ等の住民を一般的に呼ぶ俗称で、部族や民族の名称ではない。ポリネシア語で「人」あるいは「男」を意味し、日本人などが一方的に名付けたもので、近年は使われることが少ない。

(註3) 松岡静雄は民俗学者・柳田國男の弟で、著作に『太平洋民族誌』(一九二五)・『ミクロネシア民族誌』(一九四三)がある。

(註4) セデック族は日本統治下でタイヤル族の支族とされてきた。そのため、霧社事件はタイヤル族が起こした事件とされてきた。だが、セデック族が二〇〇八年に台湾政府より独自の民族として認められて以来、セデック族が起こしたのものとして捉えるようになってきている。

参考文献

- 熊本市役所編纂 一九三六『新興熊本大博覧会誌』
川村 湊 一九九六『大東亜民俗学』の虚実』講談社
落合一泰 一九九六「南」を求めて」山下晋司編著『観光人類学』新曜社
野村純一・ほか編 一九九八『柳田國男事典』勉誠出版
金子 淳 二〇〇一『博物館の政治学』青弓社